

アジ研流 読書案内

—研究者が薦める3冊

東南アジア研究における歴史、 政治経済学、そして創造する力

クー・ブルー・テック

- M. C. Ricklefs, Bruce Lockhart, Albert Lau, Portia Reyes and Maitri Aung-Thwin, *A New History of Southeast Asia*, Basingstoke, Hampshire, UK, Palgrave Macmillan, 2010
- Garry Rodan, Kevin Hewison and Richard Robison (eds), *The Political Economy of Southeast Asia: Conflicts, Crises and Change*, 2nd edition, Melbourne, Oxford University Press, 2001
- Benedict Anderson, *The Spectre of Comparisons: Nationalism, Southeast Asia and the World*, London and New York, Verso, 1998

今回この三冊を選んだのは、こ

れらが東南アジア研究の分野のなかで「ベスト」であったり「お気に入り」であったりするからではない。(もちろん、どれも素晴らしい本であって、まだ読んだことのない人にはお勧めであることは間違いない。) 東南アジア政治に関心があるものの、あまり専門的な知識を持っていない読者、しかしこれからこの分野について学びたく、まず何が重要であるかを理解するために独学しようという読者には、この三冊の組み合わせは、適切でバランスの良い基礎知識を

与えてくれる。

独学で学ぶにしても、歴史の知識は不可欠である。そのような人に、一冊目の本は、東南アジアの社会・文化・国家の歴史をどのように学び始めればよいかの示唆を与えてくれる。この一冊のなかに過去から現代までの研究がコンパクトにまとめられている。さらに重要なのは、著者たちは過去を「静止した」ものとして決めつけていないことにある。本書のなかほどの章は、現代東南アジア政治を理解するには最適である。この章は、植民地時代(タイを除く外的な力に

よる東南アジアの陥落、侵略、征服、支配の時代)から脱植民地化

(もしくは第二次世界大戦後の独立復興)をカバーしている。歴史的に重要なこの二つの時期の間に、東南アジア世界をひっくり返し、この地域と国家を私たちが知る現在の姿に再形成した困惑させられる多くの「事がら」が起きている。本書は、これらの「事がら」の非常に適切な手引きとなってくれ。この時期をカバーする各章は、それぞれのテーマが、各国ではどのように展開しているかを説明する前に、主要なテーマについての

地域的な概要を説明してくれている。その結果、旧体制の失墜、地域経済の変革や社会構造の再構成、新しい文化の形の押し付け、新しい政治組織の台頭、などに関する理路整然とした大きな絵が示されることになる。同時に、「国」と「地方」の詳細で豊富な説明によって、東南アジアの政治的軌跡がいかに多様で入り組んでいるかわかる。これら全てにおいて、ほぼ間違いなく、植民地国家の拡大による従来の政治の転換と、自立的帝国システムを通じた地域経済の世界経済への統合は、広範囲かつ永続的な影響をもたらしている。しかし、それに呼応して反帝国主義や反資本主義の活動が出現し、世界戦争や経済危機によって東南アジアの「現代」政治の大半が作られた変革されるなかで、ある時は収れんし、あるときは争いあっている。

この本の最後の部分は、この地域の最新の歴史から冷戦を越えた政治へ論を進めている。それに加えて精神的な部分、エスニシティや宗教、文化そしてアイデンティティに関して、東南アジアの一九九〇年代の好景気と不景気を採りあげている。一方、二番目のロダ

ン、ヘウィソン、ロビソン編の論文集は、東南アジアの政治を理解するには極めて重要な東南アジアの政治経済に関する体系だった入門書となっている⁽³⁾。

この本は、経済発展についての理論的アプローチに対する批判から始まっている。この理論的論文は、各国のケーススタディで構成されており、東南アジアの経済発展の経路をより詳しく学びたい読者には非常に有益である。国別の研究それぞれは、第二次世界大戦後の東南アジアの“little tigers”の発展を拒絶しているわけではない。しかしここに納められた論文は、東南アジアの発展が合理的な選択や技術主義的な実践という意味からは説明できないことを示している。逆に、国家と地域における成功と失敗というモザイクの記録は、政治と経済―権力と政治、国家と市場、異なる社会階層における野望と対立、という分け難い関係を土台としている。これは経済発展と変化（ナショナリズムや反帝国主義、共産主義、ポピュリズム、新自由主義、イスラム主義、などイデオロギー的に表現される）は、異なる社会グループの利益となったり、損ねたりしている

からである。結果的に東南アジアの政治経済を理解するためには、エリートや官僚が作ったものだけをみるのではなく、経済発展の追求においてなにが葛藤となるのかについて細心の注意をする必要があるのである。

ロビソンの論文集では、いわゆる一九九七年のアジア金融危機に焦点は当てていない。しかし彼らの東南アジア諸国の危機への対処における政治と経済のもつれあいの扱い方は、インドネシア、タイ、マレーシアにおいて、異なるレジームと強力な連立が生き残りをかけて戦っている時は、官僚的な解決と市場本位の改革が、おそらくは政治的に合理的な選択であったことをうまく説明している。

同様に、三番目の本は一九九七年の危機を中心にはしていない。しかし、なかに示唆に富んで非常に興味深い論文がある。‘Sauve qui peut’（生き延びられるものは生き延びよ）。この論文は、東南アジアの「奇跡の経済発展」と「金融危機」の要因となった、第二次世界大戦後と冷戦後の地域的かつ世界的な要因を検討している。

アジアをひとつの「地域」として扱った東南アジア研究と、ナショナリズムの理論的省察のコレクションである。あわせて、アンダーソンをしてこの地域において何がユニークであるのか、何が共有されているのを明らかにすることを可能にさしめた、東南アジア政治研究の伝統的でないやり方が、創造的かどうかを実証している。ある程度において、東南アジアの国、社会、政治の「比較の亡霊」は光をあてることだということがわかる。

これは、この「比較の亡霊」を分かち合う読者にとってはためになる経験である。世界的、地域的、国家的に重大な局面を違う鏡で見ることでアンダーソンは東南アジアの国々は「共同で連帯して」いるように描いている。彼は一国について書いている時でも、その他の国や地域を常に視野に入れていく。彼が地域を「全体」として考えるときそれぞれの社会の「特異性」と「独自性」を見失うことはない。いかなれば、彼はふたつの視点をバランスさせ、理論的な問題を提起し熟考する。このようにして、アンダーソンは文学や政治、軍事クーデターや独裁政治の転覆、選挙と民主主義的なプロセス

の限界、多数派と少数派の関係などを刺激的に描いたのである。この試みは、すでによく知られている彼の幅の広さと多才さを証明している。しかし、「不思議な形」となったこの本は（アンダーセン自身がそう言っている）ある種の硬直性、すなわち研究者がその専門性において「ディシプリン」か「地域」を選ばなければいけないというある種の洗練された硬直性を暗黙のうちに排除している。

簡単に説明したこの三冊の本は、東南アジアの歴史と政治経済とユニークさに対する鑑識眼を提供し、さらに読むことを通じて経験をわかちあうことができる。読者には、東南アジアが自らの選択余地のない容易ではない状況で、どのように自分たちの歴史と政治を作り上げてきたかについて、今後より深く広く、この本よりも先に理解を進めてほしいと願っている。

(KHOO Boo Teik / アジア経済研究所 地域研究センター 訳・濱田美紀)

《注》

(1) 筆者は本書のマレーシアの政治経済の章を担当している。